

対訳コーパスによるモダリティ表現の中日対照研究

——「だろう」と「吧(ba)」をめぐる

曹大峰^{†‡} 熊谷康雄[†][†]国立国語研究所 [‡]山東大学(中国)

cdf@kokken.go.jp ykumagai@kokken.go.jp

1. 始めに

最近、コンピュータ技術の飛躍的發展と多言語環境が急速に改善されてくるにつれて、単一言語の研究のみならず、複数言語の対照研究にもパソコンの利用が現実的なものになりつつある。われわれは現在、共同研究プロジェクト「中日対訳コーパスの構築と応用研究」¹という課題に取り組んでおり、対訳コーパスによるモダリティ表現の中日対照研究を試みているところである。

本稿では、同コーパスの作成に関する先般の報告(「情報処理学会研究報告」99-NL-134)に続き、2000万字規模を目指して構築中の対訳コーパスから対応済みデータを試用した経過に関して報告する。

2. 調査対象の特定と抽出

今回は、これまでコンピュータによる分析や研究が少なかったモダリティ表現のうち、日本語の「だろう」と中国語の「吧」を主な調査対象とした。

調査したテキストは、コーパスで対応済の中日両国の文学作品 22 篇、原文と訳文の全文テキストで、中国語 141 万、日本語 182 万、計 323 万字である。

分析対象とした対訳データの抽出は、コーパ

スの検索ツールを利用して行った。抽出内容は「だろう|でしょう|であろう」と「吧|罢」を含む単文、複文とその段落および対訳部分である。抽出した用例の数は、「だろう」が 1556 件、「吧」が 1777 件に達した。

抽出した用例をさらに訳語と用法によって振り分け、研究用データベースを作成した。その結果、次のように(表1と表2を参照)、これまで気がつかなかったことがいくつか分かってきた。

a.「だろう」は、原文(表1のJ)では「吧」との対

表1 「だろう」の対訳

だろう	J	P
吧	186	22
吧?	115	25
呢	86	57
吗	103	47
啊/呀	24	9
その他	16	9
φ	168	418
大概	69(25)	23
可能	20(12)	0
会	57(22)	46
也许	55(22)	16
恐怕	31(12)	14
说不定	7(5)	1
一定	8(3)	15
难道	33(2)	8
是否	8(3)	7
その他	57(31)	69
計	906	794

表2 「吧」の用法

吧	P	J
推測	74	407
確認要求	41	404
認識要求	9	
問掛け	25	40
意志	65	64
同意	29	
許容	27	4
提案	41	41
誘い	81	55
勧め	32	7
頼み	46	98
命令	144	164
呪詛	12	5
祈願	5	
仮定	18	4
前提	27	4
例/提示	2/4	6
計	682	1066

2 訳語による振り分け。Jは日本語原文が「だろう」、Pは原文が中国語で日本語訳が「だろう」; 数字は実例の件数、()の中は副詞単独対訳の数 φは訳語無し、つまり不訳の場合

3 用法による振り分け。Pは中国語原文が「吧」、Jは原文が日本語で中国語訳が「吧」

1 中国社会科学基金助成プロジェクト、北京日本学研究中心で組織・実施中(代表者は同センター徐一平教授)。

訳が 301 件(33%)しかなく、訳文(表 1 の P)ではさらに 47 件(6%)と大変低い。そのため、「吧」と「だろう」が対応しているというこれまでの「対応説」は見直す必要があるだろう。

- b. 「吧」以外の対訳表現の分布から、「だろう」の意味特徴とバリエーションが窺える。また、不訳率(19%)と副詞単独の対訳率(12%)、訳文に目立つ不訳率の高さ(53%)など、「だろう」と「吧」の相違を見極めるのに有用な手掛かりである。
- c. 「吧」は情報文だけではなく、行為文(表 2 P「問掛け」から「祈願」まで)にも 71%と多用されている。ここにその基本的性質と共通性の所在が問われる。また、訳文に目立つ推測・確認用法の高い出現率(76% 表 3 J)についても、やはり原因が問われなければならない。

3. 文法要素の抽出と分析

「だろう」と「吧」の両語はいずれも文末モダリティ形式として機能し、ともに対事的モダリティと対人的モダリティの意味を表すことができるもので、これまでの対照研究ではその対応の用法が注目されてきたが、しかし、同じまたは近い意味を表す両言語の文法形式でも、基本義や用法の展開は必ずしも同質や同方向のものとは限らないので、対照研究によって両形式の基本義の原点と用法の接点を見極める必要があると思う。本稿第 2 節で示した調査結果に見られるように、その非対応的用法にも注目すべきである。

筆者は両形式のモダリティ表現機能の接点と原点を解明するために、コーパスから得られた対訳データに対し、意味関係や共起関係を示す文法的要素を抽出し、分析を進めているところである。ここに文法要素の抽出内容と一部の分析結果を紹介する。

まず、これまでの諸説に基いて表 3 のように文法要素と抽出位置を設定した。この設定で抽出した文法要素に基いて、「か・な・ね・

よ」という後接要素を除いた「だろう」(原文)の各用法の対訳率を表 4 のようにリストアップした。

次にこれまでの諸説をまとめて、五つの用法と中間用法を設定し、表 4 の用法順にいくつかのポイントを上げよう。

- a. 例(1)のように、用法 1(未特定推測)では「呢」の対訳(50%)が目立ち、一つの類を成

表 3 文法要素と抽出位置

検 索 語	訳語	位置			主 体	談 話 種 類
		直 前 前	直 前	直 後		
だ ら う	吧 呢 吗 (y)a φ 副詞	陳 述 副 詞 ・ 疑 問 詞 ・ 時 相 表 現 ・ 感 動 詞	の こ と は ず べ き か も し れ な い …	か、ね な、よ が、と 「？」 「。」 「、」 「。」 …	話 者 ・ 対 者 ・ 他 者 ・ 全 体	独 話 ・ 会 話
吧	だろう系 か系 (よ)う系 命令形系 する系 だ系 いい系 その他		啦 呢 了 …	「？」 「。」 「、」 「。」 …		

表 4 「だろう」の各用法⁴の対訳率

用法	1 (94)	2 (382)	3 (54)	4 (96)	5 (1)	6 (44)
訳語						
吧 1(163)	2	35	30	8	?	10
吧 2(83)	1	5	50	20	0	41
呢(61)	50	2	0	0	0	14
吗(54)	1	0.8	13	40	30	10
啊/呀(20)	9	1.6	2	2	0	9
その他(15)	6	2	2	1	0	0
φ(142)	20	24	0	24	30	16
大概(25)	0	7	0	0	0	0
可能(12)	0	3	0	0	0	0
会(22)	3	4	2	1	0	0
也许(22)	0	6	0	0	0	0
恐怕(12)	0	3	0	0	0	0
说不定(5)	0	1	0	0	0	0
一定(3)	0	0.8	0	0	0	0
难道(2)	2	0.3	0	0	0	0
是否(3)	1	0.3	2	0	0	0
その他(24)	4	4	0	4	10	0

4 用法類型: 1:未特定推測 2:特定推測 3:推測確認要求 4:既存事実
確認要求 5:眼前状況確認要求 6:中間用法; ()内は文例件数

していることを感じさせる。疑問詞の高い出現率（ほぼ100%）も、「判断形成過程」⁵という語感も特徴といえよう。

(1) この変化の原因は、いったい何だったの
だろう？(砂の女 932)

这个变化的原因究竟是什么呢？

b. 副詞訳や不訳現象は用法 2(特定推測)の面白いところである。例(2)(3)のように、主文末から離れるほど、その特徴が目立つことが観察されている。

(2) 「御苦労だろうが、この命令は実行に移してもらわなければいかんよ」(黒い雨 816)

“虽然很辛苦，但务必请你执行这个命令。”

(3) 橋の高さは百尺あまりだろう。川をのぞくと身が竦む。

桥大概有三十多米高，朝江面上一看，身子都发抖。(黒い雨 329)

c. 用法 3(推測確認要求)には、むしろ「吧」の訳が中心で、「呢」や副詞訳と不訳現象が見られないのも情報要求という伝達性格に関係するのであろう。また、例(4)のように、用法 2 と用法 3 の中間的用法が多いのも特徴である。

(4) 「道楽者だね。もういい年なんだろう。」

“大概是个浪荡人。年纪恐怕也够大的吧？”(雪国 753)

d. 用法 4(既存事実認識要求)には、「吗」の訳が目立つ。例(5)のように、否定疑問文の形となるのが特徴といえる。また、例(6)のように不訳現象もあることは、情報要求と情報提供の二重性格を物語るものだろうと思われる。

(5) 「だって君の家、病人があるんだろう。」

“可是，你家里不是有病人吗？”

(雪国 351)

(6) 「…私の生れは港なの。ここは温泉場でしょう。」(雪国 134)

“…我出生在港市，可这里是温泉浴场。”

e. 用法 5(眼前事実認識要求)は、調査した原文には見付らず、訳文では例(7)のように、見付ったが、不訳と否定的疑問表現であった。さらに調査範囲を広げて探したところ、例(8)のように、「吧」の対訳もあった。

(7) 这不，矿医院门前小小的空场上，就摆着两口棺材(♂/♀吧)。

ほら、炭鉱病院前の小さな空地に棺桶が二つ置いてあるだろう。

(8) 「ほら、あすこにあの、ピンク色の洋服を着たお嬢さんと一緒に踊っているでしょう、あれがまアちゃんよ」(痴人の愛 716)

“你看，那边有个个人在和一位穿粉红色洋装的小姐跳舞(吧/♂)。他就是阿熊啊。”

(7)と(8)は、共に眼前描写で相手に新規知識への認識を要求する⁶文であるが、しかし、(7)は「这不」という否定的要素のためか、「吧」への置き換えは無理のようである。

4. 現段階の提言と今後の課題

ここに筆者の現段階の考えを整理して、「だろう」と「吧」の意味機能の原点と接点に触れてみたい。

まず、文の言表事態を認識系・意志系・行動系に大きく分けて、上述の調査結果に基いて、両形式の意味範囲と「不確定」という共通機能を表5に示した。

表5 意味範囲と共通機能

	言表事態			共通機能
	認識系	意志系	行動系	
だろう	○	×	×	○
う/よう	△	○	×	○
吧	○	○	○	○

上表から見れば、接点是不確定機能にあることが分かる。そして、「だろう」に関しては、これまでの「おしはかり説」(奥田 1984・85)、「推量説」(仁田 1991・2000)、「判断形成過程

説」(森山 1990・2000)などの成果を踏まえて、「認識+不確定」という原点を提案したい。この原点からは、「だろう」の5つの用法を統一的に説明することができ、語用的にその機能展開のプロセスを求めやすいのではないかと考える。

また、「吧」に関しては、これまでの「信疑中間説」(呂 1955・陸 1984)、「不肯定説」(胡 1981)、「判定保留説」(木村・森山 1992)、両面共存説(王 1999)の成果を踏まえて、「対立前提の偏りの表示」という基本義を抽出したい。これを原点にすれば、「吧」の多様な用法を統一的に説明することができるばかりではなく、次のようにこれまで気付かれなかった問い掛け用法への理解にも役に立つであろう。

(9)“两位先生要冰淇淋吧？”(『关于女人』)

「お二人さまは、アイスクリームになさいますか」

(10)“睡得好吧？”(『关于女人』330)

「よく眠れましたか。」

(9)と(10)は情報要求の文で、ある事態の存在を明示的前提として問いかける一方、その事態と対立する前提も暗示することによって、質問の柔らかさと話者の関心を表そうとするのである。このような表現心理は、「だろう」の対訳では表されないのであろう。「だろう」や「う／よう」とつながる「吧」の「不確定」機能も対立項の暗示的存在から二次的に発生したものと思われる。

上述の基本義の原点と用法の接点に関する設定は未だ仮説の段階であるが、対訳コーパスから有力な根拠を求めようと作業を続けているところである。今後の課題は、共起関係・対訳関係の分析や場面要素の取入れ、統計的分析により文法事実を映し出すことなど、多く残っているが、対照言語学的研究へのコーパス利用の可能性を最大限に見出すために、引き続き模索をしていく所存である。

謝辞

本稿は曹大峰が国立国語研究所外国人研究員招聘期間においてまとめたものである。熊谷康雄は原稿に目を通しコメントした。本研究を導いてくださった国立国語研究所日本語教育センター長中野洋氏が昨年12月亡くなられた。ここに心から中野先生に感謝と追悼の意を表したい。また、本研究に指導と協力を頂いた国立国語研究所日本語教育センター指導普及部長佐々木倫子氏に謝意を表す。

参考文献

- [1] 呂叔湘 1955『語法學習』中国青年出版社
- [2] 胡明揚 1981「北京話的語氣助詞和嘆詞」『中国語文』1981・5,6
- [3] 陸儉明 1984「关于现代汉语里的疑问语气词」『中国語文』1884/5
- [4] 奥田靖雄 1984・1985「おしはかり(1)(2)」『日本語学』3・12, 4・2.
- [5] 仁田義雄 1991『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- [6] 木村英雄・森山卓郎 1992「聞き手情報配慮と文末形式」『日本語と中国語対照研究論文集』くろしお出版
- [7] 井上優・黄麗華 1996「日本語と中国語の真偽疑問文」『国語学』184
- [8] 王志英 1999「中国語の語氣助詞「吧」の伝達機能」『中国語研究』41号 白帝社
- [9] 安達太郎 1999「日本語疑問文における判断の諸相」くろしお出版
- [10] 曹大峰・中野洋・徐一平・隈井裕之 1999「中日対訳コーパスの作成状況と今後の課題」『情報処理学会研究報告』99-NL-134
- [11] 仁田義雄「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店(刊行予定)
- [12] 森山卓郎「モダリティの体系」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店(刊行予定)